

東京バッハ合唱団 月報

[第 661 号] 2017 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp <http://bachchor-tokyo.jp/>

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 661

July 2017

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

カンタータ第 187 番《待ち望む みな なれを》 自然の恵みへの感謝、野尻湖のカンタータ

大村 健二 (団員)

野尻湖にでかけると、ついでに俳人小林一茶の記念館を訪ねることがあります。しなの鉄道(旧信越本線)の黒姫駅が野尻湖への出入り口になっているので、駅から徒歩でも数分の距離(ただし、小山を登る)の一茶記念館にはたびたび立ち寄りしました。そのつど一茶の俳句かるたを土産に買い込んだので、我が家には4、5種類あるはずです。気のおけないお客があると、取りだしてカルタ取りをします。その中に「御仏や寝てござっても花と銭」の一句があって、これが実に気に入っています。ついでにお神酒(みき)と冷ややつこ……とでもつづけば理想です。

さて、合唱団の創設の翌年(1963年)から、支障のないかぎりほぼ毎年、夏の野尻湖合宿がつづいています。ほとんどの団員が参加なさいます。一昨年8月の「3.11被災地訪問演奏・南相馬公演」や過去5回のヨーロッパ巡演、夏季の集中練習などのある年をのぞき、いつの間にか年中行事に定着してしまいました。

今年は目下、11月公演の《ロ短調ミサ曲》の仕上げに注力している最中ですが、一分の隙もない、あの巨大な構築物の圧迫からすこしばかり離れて、われわれの本領である教会カンタータの世界に、しばし安らいでみたいという思いから、今年の野尻湖畔の神山教会コンサートでは、自然の恵みへの感謝をうたう、バッハ最盛期のカンタータ BWV 187《待ち望む みな なれを》をとりあげてみることにしました。そうは言っても、この4月からの新規参加の方々は、当の《ロ短調ミサ曲》の外観すら霧の彼方といったスタート地点で「いきなり新曲?!」と、驚かれたことでしょう。たぶん、他の合唱団では、こんな暴挙はあり得ません。ひたすら目標の曲を、わき目もふらずに仕上げていきます。が、われわれは、寄り道をすることにしました。それは実は、安らぎの避暑地への道、というよりか、後に触れますように、《ロ短調ミサ曲》の本質に迫る王道となるかも知れません。

夏の野尻湖の風景にふさわしく

このカンタータに親しみをもっていただくために、教会暦上の主題と初演の日付けを、先ずとり上げてみます。

バッハの教会カンタータと呼ばれるジャンルが、当時のドイツ・プロテスタント教会の礼拝のために作曲されたことはご存じのとおりです。キリスト教社会に

は、真冬の「待降節第1日曜日」に始まる、教会暦(典礼歴)と呼ばれる一年のカレンダーがあり、一つ一つの日曜日に名前がついて、当日に読まれる聖書の箇所が定まっています。クリスマス、受難節、イースター、聖霊降臨祭、三位一体節などの大きな節日は、1年の前半にあり、季節は春から夏に向かっていきます。

本日のカンタータ第187番がバッハの手によって作曲され、初演されたのは1726年の「三位一体節後第7日曜日」であったことが知られています。この年の当該日曜日は8月4日でした。

この主日に定められた福音書の箇所はガリラヤの奇跡の一つ、「7つのパンが4千人を満たす」(マルコによる福音書8章1節~9節)です。イエスの説教を聞こうと多くの群衆があつまっていますが、何も食べる物がなかった。「何か食べ物を用意なさい」と、イエスに言われた弟子たちが答えます。「こんな人里離れた所で、いったいどこからパンを手に入れて、これだけの人に十分食べさせることができるでしょうか」。しかし、そこにあった7つの小さなパンを群衆に配らせたところ、人々は食べて満腹したうえに、残ったパンの屑を集めると、7籠になった。そこにはおよそ4千人の人がいた、と記されています。

初演日の1726年8月4日が、われわれが野尻湖畔の神山教会で演奏する日(8月5日)の291年前にあたることは何の意味もありませんが、初演のライブツィヒとは同じ北半球にあるので、近い季節感の中で歌い、また聴くことができる、ということは大事なことでしょう。もう一つ、イエスの奇跡がガリラヤ湖のほとりでなされたことも、湖畔でこの曲に触れることと、何やらうれしい偶然を感じさせます。以下の内容を見ると、大いに意味を持ちます。

カンタータ第 187 番《待ち望む みな なれを》

この作品は、7つの楽曲からなります。

1) 合唱《待ち望む みな なれを》は、詩篇 104:27, 28 (ルター訳)の引用です。

待ち望む みな なれを

時を得て糧(かて)を賜わんと。

主賜うときそを受け

み手を開くとき彼ら良きものに満たさる。

(大村恵美子訳詞の全文は、下記に対訳で掲載;

http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm)

合唱フーガの形で、おおらかにかつ躍動感をもって、こんこんと湧きでる「糧」と「良きもの」を表出しています。以下のガリラヤ湖畔の出来事を予感させます。

2) バス・レチタティーヴォは、創造の業の豊かさを讃える詩篇 104 篇全貌の要約。

3) アルト・アリア〈日々のさかえは 主の恵み〉。揺るぎない祝福への確信を、舞曲の軽やかさで歌う。

4) バス・アリア〈思いわずらい 言うな〉は、ご存じ「山上の説教」(マタイ福音書 6:31, 32) のイエスのことば。〈み父 すでに知る なれらの求むるものすべてを〉と、2 拍子の堂々たる表白です。

5) ソプラノ・アリア〈神 生かし養いたもう〉。イエスのことばを受けて、オーボエとの二重奏による〈われ〉の信仰告白。神の創造の神秘を歌う前半のアダージョと、〈消え去れ わずらい〉と決然と歌い出す後半のウン・ポコ・アレグロの対比が圧巻。

6) ソプラノ・レチタティーヴォ〈幼児のごとく よりたのみ〉。アリアを導く順番を入れ替えて、つづくコラールを準備する、この配置が新鮮です。

7) コラール〈主は 大地ととのえ〉。ハンス・フォーゲル (1525-67) による食卓の讃美歌の 4 節と 6 節。16 世紀以来、ドイツの多くの家庭で歌い継がれたもの。

教会カンタータからミサ曲へ

ところで、このドイツ語で書かれたカンタータの主要部分は、後にラテン語のミサ曲に改編されます。

そもそも「ミサ曲」とは、ローマ・カトリック教会の典礼式(これ自体が「ミサ」です)の中で歌われる音楽で、中世以来の定式化したラテン語の式文を歌詞としています。

ミサ曲とカンタータの違いは、歌詞がラテン語か民衆語(ドイツならばドイツ語)かという点に加え、前者が一般的に、教会暦のいかなる時節のどの主日でも、同じ〈キリエ〉に始まり、〈アニュス・デイ〉に至る不変の式文(ミサ通常文)を歌いつづけるのに対し、後者は、日曜ごとに異なる歌詞に作曲されました。当時の教会音楽家の務めは、それぞれの教会にストックされた、当該日曜日用の作品の中から演奏するか、一時期のバッハのように、毎週の日曜日ごとに新たなカンタータを作曲しつづける、という尋常ならざる務めを果たしたりします。このころのバッハ配下のトマス学校の生徒たち(小学 1 年から高校生くらい)は、新曲の出来上がるのを待って、数日間で練習して仕上げ、日曜礼拝での演奏に間に合わせたわけですから、今の世の合唱団員も見習いたいものです(?)

こうした教会暦に沿ったドイツ語歌詞に拠る音楽を、各週の礼拝に提供することを本務とするプロテスタント音楽家バッハですが、改革以前の形式によるラテン語の音楽をいくつか残していました。そのなかには、11 月に上演する《ロ短調ミサ曲》(BWV 232) のほかに 4 つのミサ曲が含まれます。ただし、ミサ通常文全 5 章の全体を歌詞としたものは、われわれの《ロ短調》

だけなのであり、他の 4 曲の歌詞は〈キリエ〉と〈グローリア〉の先行 2 章だけに作曲されたものでした。

当カンタータに即して言えば、初演から 12, 3 年の後、バッハは、この曲のレチタティーヴォとコラール以外の全曲を、《ト短調のミサ曲》BWV 235 に書き換えています。具体的には、1) 合唱〈待ち望む みな なれを〉の音楽は、Cum Sancto Spiritu 〈み霊とともに〉へと改編されました。3) アリア〈日々のさかえは 主の恵み〉は、Domine fili unigenite 〈いと高き神のひとり子〉、4) アリア〈思いわずらい 言うな〉は、Gratias 〈み神に謝しまつらん〉、5) アリア〈神 生かし養いたもう〉は、Qui tollis peccata mundi 〈世の罪のぞくもの〉といった具合ですが、具体的な歌詞の書き換え(「パロディ」)のすがたは現物にあたっていただくしかありません。曲順は移動していますが、調性の色合いからテンポ、曲想にいたるまでの音楽としての根本は生き続けます。

ドグマにいのちを吹き込む

バッハの、ミサ曲などを中心としたラテン語教会音楽への志向を、たとえば、ドレスデン宮廷への表敬や、前項でふれたドイツ語カンタータの教会暦による上演機会の限定性への不満から説明してみようとする意見があります。しかし、それを容れたうえで、バッハの並外れた器量からうかがえる、つぎのような感想をわたしは抱くのですが、いかがでしょうか。

ミサ曲 BWV 235 が、カンタータ BWV 187 から、パロディとして受け取った音楽は、ミサ式文の〈キリエ〉部分、および〈グローリア〉部分の冒頭(ルカ伝にあるクリスマスのテキスト、天使の讃歌から羊飼いの讃歌、すなわち、極めて視覚化しやすい章句)を除く、Gratias agimus tibi 〈み神に謝しまつらん〉から Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris, amen 〈み栄えのうちにアーメン〉にいたる〈グローリア〉の後半すべてに及びますが、ここはドグマ性の高い章句となっています。

バッハが〈グローリア〉の音楽化を望んだとき、カンタータ《待ち望む みな なれを》の、いずれかの楽章が思い浮かんだのでしょうか、あるいは順序は逆で、カンタータ作曲の時点からミサへの音楽転用を企図していたのかも知れません。

ミサ式文の順序でいうと、Gratias agimus tibi 〈み神に謝しまつらん〉のテキストを、当カンタータの 4) バス・アリアの旋律〈思いわずらい 言うな〉に載せて歌ってみる。ドイツ語の音節構成(*Darum sollt ihr nicht sorgen*)とラテン語のそれの違いによって、まったく新しいリズムが生まれ出て来ますが、音楽の情調(アフェクト)はみごとに保たれています。すなわち〈み神に謝しまつらん〉の音楽の背後には、当カンタータでの具体的な山上の説教やガリラヤの奇跡をとおしての、天地創造の神への絶大な信頼があります。バッハにとっての神への感謝 Gratias は、かくも具体的なのです。他の楽章、他の式文、すべてで確かめてみてください。

年末の《ロ短調ミサ曲》にあつては、掘り下げれば、もっと深く、もっと納得のいく結論が得られるに違いありません。

第116回定期演奏会(2018年)、選曲の意図

“敵を許し 天では神の子 すべての友に”

大村 恵美子 (主宰者)

創立55周年を記念して、5回目の《ロ短調ミサ曲》公演を敢行する私たちであるが(ラテン語原詞上演3回、日本語訳詞上演2回)、これを終えると、今やまた、来年5月12日の第116回定期演奏会(武蔵野市民文化会館小ホール)から、この合唱団にとっては、なつかしい“カンタータ”の世界に立ち戻ることになる。

一方では、55年間に手をつけ残した数十曲のカンタータの限られた中から、どのような選曲で、定期演奏会ごとのまとまった意味づけをして、その日の聴衆・演奏者全員のよろこびを得ることができるか、という課題に面し、それを、未演と既演の組み合わせによって、うまく構成しおおせなければならない。

もともと、シュミーターが順番を決めた、バッハの作品番号(BWV「バッハ作品総目録」1950)は、その一つひとつの順番の根拠を、私などは今さら調べてはいないのだが、将来の定演のプログラミングを詮衡中に、連続番号になっていて、私の目についたのが、BWV 176、177、178の3曲だった。別の例では、バッハの人生の或る一定の時期、たとえば同じ年の何ヵ月かにわたってとり上げることで、恰好のプログラムと見なせるようなものもあったが(第120定演に予定、後述p.4)、上述の3曲は、時期的には次のとおりで、さほど接近している訳ではない。

- BWV 176……初演 1725年(5/27、三位一体節)
- BWV 177……初演 1732年(7/6、三位一体節後第4主日)
- BWV 178……初演 1724年(7/30、三位一体節後第8主日)

しかし、これら3曲には、三位一体節およびその後、という指定のほかにも、この世の戦いに関する自己の

態度を歌ったもの、という共通の内容が見受けられるのである。私は、これらの考証に際して、BWVの順序にこだわることなく、次のように、演奏順を並べ直してみた。そしてこの定演全体のタイトルを、“敵を許し 天では神の子 すべての友に”と、少し欲ばったものにした。

1) BWV 178《主 われに在(いま)さずば》(1724)、イ短調。敵との戦いに臨み、神を味方と頼んで、〈にせ預言者〉を警戒し、当時はやりつつあった〈啓蒙思想〉に抵抗する。

2) BWV 176《あらい また怯(ひる)むは 心の常》(1725)、ハ短調。「教師でありながら、生の霊的側面を理解できない」ニコデモの優柔不断さに触れ、「永遠の命を得るためには、信仰をより堅く保たねばならない」(礪山雅氏解説)と強調。

3) BWV 177《呼びまつる イエスよ》(1732)、ト短調。世を嘆き、争いの場ではイエスに護りをねがい、第3曲のソプラノ・アリアでは、〈敵を赦さん われも赦したまえ〉と、「愛敵」にさえも及んでいる。

これが、1724年(バッハ39歳) - 1725年(40歳) - 1732年(47歳)と、人生の3段階の心境を反映した3作品の順序と云えよう。

◆4 作品のコラール訳詞

私たちは現在、相手に戦争を仕掛けてやっつけようとすれば、即座に共死にして、人類は全滅する羽目に陥ってしまったと覚悟しているから、やむを得ず渋々ながらも、極悪と見なす敵にも攻め込めないでいる。長い歴史の経緯の末、これは私たちに対する神の手きびしい教訓で、決して穏和な気持ちからの、自発的な平和希求とは程遠いかも知れない。それでも、敗戦国日本は、軍隊消滅以来70年間、人殺しに手をくだすことから免れてきた。肌身に感じて学んだ結果、相手を滅ぼそうと意図するものは滅び、共に生き、地上の生をたのしもうと求めるものが、生きのびるのだと悟る。

このような人間性善説の至福を、この日のバッハの作品の最終コラールの歌詞をここに並置して、レジュ

なりました。しかしそれぞれが音楽を続けていて、孫娘二人もピアノを弾いています。この7月にリナ(Lina)は14歳、マヤ(Maya)は12歳になります。学校の勉強(ギムナジウムに通っています)が忙しくなってきた、ピアノと両立させるのが大変になる年頃ですが、ほそぼそとでも長く続けてほしいと願っています。

皆様から大村先生ご夫妻と合唱団の皆さまに、どうぞよろしくと申しております。

そろそろ入梅でしょうか。どうぞお身体を大切になさって下さいますように。

2017年6月12日

ワルブレヒト 幸子
Gerhardt

ドレスデン便り

すっかり夏らしくなりました。

先日は思いがけず、月報2017年6月号とその別冊「創立記念日の思い出を中心にたどる」、さらに11月のロ短調ミサ曲公演のチラシをお送りくださりまして誠に有難うございました。お変わりなくご活躍の様子が目に浮かびます。東京在住中には、大村先生ご夫妻およびバッハ合唱団の皆さまには、いろいろお世話になったことを想い、感謝しつつ、別冊の記録を読ませていただきました。

早いもので、同じドイツに住んでいても、独立した子供たちとその家族が一堂に揃うのは、年に1、2度に

メのつもりで味わっていただく。そして、さらにこの日の第4の最終カンタータこそ、BWV 1《あしたに輝く たえなる星よ》(初演 1725. 3. 25、40 歳、へ長調)であり、その、全く天国的な晴朗・明澄そのもののようなコラールを、会場すべての皆様とご一緒に歌って、みちたりた足取りで帰途に着いていただく所存である。

1) BWV 178 《主 われに在(いま)さずば》、第 7 曲

あだの はかりごと
思いの すべて
主に 知られたり。
われも ゆるがじ。
信仰に あらごう
人の心 むなし、
慰めの 前に。

主よ 天(あめ)と地(つち)の
基いを 定め、
その光 いよよ
われらを 照らせ。
まことの 愛もて
堅く 立たしめよ、
終わりの 日まで。

ユストゥス・ヨーナス「主 われに在さずば」(1524)、第 7 節・8 節

2) BWV 176 《あらい また怯むは 心の常》、第 6 曲

み国の戸 めざし
われら 進みゆかん。
かしこにて 歌わん
こぞりて とわに。
主こそ 王なれば
高きに 坐したもう。
父 み子 みたまの
一つなる 神は
われらの 救い。

パウル・ゲルハルト「すべて 世の知恵は」(1653)、第 8 節

3) BWV 177 《呼びまつる イエスよ》、第 5 曲

戦い あらごう
弱き われを
ただ み恵みこそ
たすけ 強めたもう。
嵐 迫るとき
浚(さら)わせたもうな、
危うき
防ぎ 護り
見捨てたまわされ。

ヨーハン・アグリコーラ「呼びまつる イエスよ」(1531)、第 5 節

4) BWV 1 《あしたに輝く たえなる星よ》、第 6 曲

げに 幸なるかな、

とこしなえの 主に
より頼めば。

あまつ み国にて

主は われを招き

友としたまわん。

アーメン アーメン

来ませ 喜びの わが君

主こそ わが望み。

フィリップ・ニコライ「あしたに輝く たえなる星よ」(1599)、第 7 節

◆今後の定演 (#116-121) 曲目と選曲の主題

定期演奏会は、できることなら、年に 2 度の開催と定めたいが、ご存じのように、団員数の課題や、維持経費・公演開催費などの構造的な難問をかかえながらの、ギリギリの運営状態であるので、将来にわたっての計画には不確定な要素が多い。実際には、間隔を空けたり、間引いたり、なども余儀なくされることもあるかと思われる。それでも、まずは、予定を披露し、進むべき方向をお示ししておくことにする。

○第 116 定演、テーマ「敵を赦し 天では神の子 すべての友に」

・上掲の 4 曲

2018 年 5 月 12 日 (土) 14:00

武蔵野市民文化会館小ホール

<以降、日程会場等未定>

○第 117 定演、テーマ「年 改まり」

・BWV 28《ほむべきかな 年終り》(1725)

・《クリスマス・オラトリオ》I・II・III (1734)

(2018 年、12 月頃予定)

○第 118 定演、テーマ「悩むさなかにも 堅き望みを」

・BWV 109《われは信ず わが主よ》(1723)

・BWV 166《いずこへ 主よ ゆきたもう》(1724)

・BWV 188《わが堅き望み》(1728)

・BWV 79《神は わが光 盾》(1725)

(2019 年、5 月頃予定)

○第 119 定演、テーマ「地に恵みと真」

・BWV 110《喜び 笑い溢れ》(1725)

・《クリスマス・オラトリオ》IV・V・VI (1735)

(2019 年、12 月頃予定)

○第 120 定演

・BWV 184《待ちのぞみたる 喜びの光》(1724. 5. 30)

・BWV 93《ただ 主によりたのみ》(1724. 7. 9)

・BWV 113《イエス 高き宝》(1724. 8. 20)

・BWV 78《イエス わが心を》(1724. 9. 10)

(2020 年、5 月頃予定)

○第 121 定演

・モテット 1 番《主にむかいて歌え 新たな歌》

BWV 225 (1736/37)

・《マニフィカト》ニ長調、BWV 243a (1733)

(2020 年、12 月頃予定)

EC7